教育新聞

先を生きる・2023-12-11

【落語教育で心に種を】　「じゅげむじゅげむ」もっと面白く

【シリーズ】落語教育で心に種を

小松 亜由子　教育新聞 特約記者

落語で個性を引き出す教育者になりたい。個性を武器に人を笑わせることができる力を育み、自分を愛する力を育てたい――。有名な落語の小噺（こばなし）の一つ、「寿限無」を芸名に持つ「楽亭じゅげむ」こと小幡七海さんは、そんな思いを胸に小学校教諭を退職し、現在は落語教育家として5000人を超える子どもや大人たちに向けて落語教室などを開催している。インタビューの第1回ではじゅげむさんの出前授業の様子をレポートし、授業に込めた願いを聞いた。（全3回）

誰もが「笑い」に真剣になる教室

子どもたちに向けてあいさつするじゅげむさん＝撮影:市川五月

「皆さん、お客さんにもっと笑ってほしくないですか」

落語教育家の楽亭じゅげむさんの明るく張りのある声が教室に響き、子どもたちが気合いの入った表情に切り替わる。10月15日、千葉県にある柏市立大津ケ丘第一小学校の4年生の出前授業の冒頭で見られたシーンだ。

子どもたちが取り組んでいる課題は、「落語の小噺を作って披露する」というもの。12月に行われる地域住民も招いての発表会に向けて、4年生2学級の児童が9月から4～5人のグループで台本づくりに取り組んできた。この日に至るまで、じゅげむさんはオンラインでの指導などを行ってきたが、実際に顔を合わせるのはこの日が初めてだという。

に行われる地域住民も招いての発表会に向けて、4年生2学級の児童が9月から4～5人のグループで台本づくりに取り組んできた。この日に至るまで、じゅげむさんはオンラインでの指導などを行ってきたが、実際に顔を合わせるのはこの日が初めてだという。

「もっと良くなるポイントが3つあります。まずは、話をするときに見る方向。ちょっと見てください」と言って、じゅげむさんは4人での会話を一人で演じてみせる。どの役も正面を見ながらせりふを話している。

「どうですか？」とじゅげむさんが問い掛けると、すかさず子どもたちから「向き合っていない！」「相手の目を見ていない！」との声が上がる。

次にじゅげむさんが指摘したのは、「本当の動きと表情」。「甘い」と「辛い」を無表情気味に演じて見せた後、子どもたちに「本当ならどんな動きや表情になるか」を演じさせる。その上で、じゅげむさんが「プロの技ですよ」と見せたのは、一瞬の間（ま）をおいてからのリアクション。「『甘い』などの気付きや体の反応は、少し遅れてから出します」

続けてじゅげむさんは、「小噺に失敗を3つ以上入れよう」とアドバイスする。うなずきながら聞き入っていた子どもたちはその後、担任の杉山雄太教諭の指示を受け、グループに分かれて台本の手直しをした上で、落語の練習を始めた。じゅげむさんの大きな動きや面白い話し方を見て、「自分たちも笑わせよう」という意欲が高まっている様子が見て取れる。

グループごとに笑いのポイントを指導する＝撮影:市川五月

グループごとに笑いのポイントを指導する＝撮影:市川五月

杉山教諭と一緒に各グループを回り、個別に指導するじゅげむさん。子どもが演じる落語を見ては何度も声を上げて笑い、終わりには必ずそれぞれの良いところを伝える。「会話のテンポ感がすごくいい！」「動きがめっちゃ面白い！」

その上で、「もっと笑ってもらうには」と、せりふやオチ、動きに対してアドバイスを送る。子どもたちは実に楽しそうに、せりふを言い換えたり、アイデアを出し合ったりしている。日常にはない大きなリアクションや、人に笑ってもらうための工夫が、楽しくてたまらないといった様子だ。

各グループへのアドバイスが一通り終わったところで終了のチャイムが鳴ったが、活動をやめる子は一人もいない。「もっと良くしよう」と活動に没頭する子どもたちを杉山教諭が落ち着かせ、席に着かせた上で授業の振り返りに入った。

「今まで見たことがない姿」

じゅげむさんを外部講師として招いた杉山教諭は、出前授業を企画した背景について「今の4年生は、入学したのがコロナ禍真っただ中の2020年4月で、長い間さまざまな制限を受けてきた。そのせいか、私が今まで担任してきたどんな子たちより、自分の思いを表現する力が弱く思える。昨年度担任した時から、『自己表現の経験が不足している』と強く感じてきた」と述べる。

そうした様子を見て、杉山教諭は国語に「落語」の単元があるのを活用し、表現する力や相手を大切にする姿勢を養う学習を取り入れようと考えたという。「妻の出産に伴い育休を取っていて、今年9月に仕事に復帰したタイミングで『落語』の学習に入ることにし、じゅげむさんに依頼をした」と話す。

杉山教諭は前任校にいた5年前から、じゅげむさんと交流があったという。その当時から、ただ外部講師に授業を「丸投げ」するのではなく、狙いに沿って共に授業を作り上げていきたいと伝えた。

じゅげむさんの言葉に大きな笑いが起きる＝撮影:市川五月

「オンライン会議で何度も打ち合わせしながら準備を進めてきた」と話す杉山教諭。じゅげむさんによる初の対面指導となった今回の授業を振り返って、「昨年度から担任してきてよく知っている子たちだが、今まで見たことがないような姿を見ることができた」と話す。

「今まで見たことがないような姿」とは、具体的にどのような姿だったのか。杉山教諭は「グループ活動が上手にできず、友達と衝突しがちな子や、普段は言動が自分本位になりがちな子が、『もっと工夫しよう』と力を合わせたり、授業終わりの振り返りで自分から手を挙げて『もっと面白くしたい』と発言したりしていた。普段はなかなか輝けない子が、今日は輝いていると感じた」とうれしそうに語る。

子どもたちの成長を感じたと振り返る杉山教諭は、今後の展望について「落語の授業や発表の経験から、今後は相手を大切にする姿勢や自分の思いを表現する力を伸ばしていけるよう、継続して見守っていきたい。だからといって、『落語の授業でやったでしょ』と指導するのではなく、日常にじんわりと生かせるよう、必要に応じて声掛けしたり手を差し伸べたりしていきたい」と笑顔で話す。

落語で得た力が生きるよう願って

――授業後に杉山教諭から振り返りを語ってもらいましたが、じゅげむさんはどう感じましたか。

杉山先生がおっしゃった「普段はなかなか輝けない子が、今日は輝いていた」という話は、私にとってすごくうれしいことです。ずっと「学校にそういう活動があるといい」と思いながら、落語教育家として授業をさせていただいてきたからです。

私自身は外部講師の立場であり、子どもたちの普段の姿を知りません。なので、こうした話を担任の先生から教えていただけるのはとてもありがたいことです。

授業の様子を振り返るじゅげむさんと杉山教諭（左）＝撮影:市川五月

――「落語の授業で得た力が、日常にじんわりと生かせるように」とのお話がありましたが、じゅげむさんはどう思われましたか。

それこそがまさに、私がやりたいと思っている「種まき」に当たります。落語の出前授業をして、「落語って面白いんだな」で終わってしまうのではなく、落語を通じて得た力を生きる糧の一つにしていってほしいんです。

ただ「教えて」と依頼されて授業をするだけでも、もちろん意味はあります。でも、私の願いは先生と一緒に授業をつくり上げて、そこで培った力が小さな種になって子どもたちに根付き、花を咲かせて実を結ぶことです。いつもそんな考えでいるので、今日はとてもいい時間を過ごさせていただきました。

【プロフィール】

楽亭じゅげむ、小幡七海（らくてい・じゅげむ、おばた・ななみ）　Lauqhter代表理事。大学を卒業後、小学校教諭に。退職後、「花まる学習会」で働きながら落語を使った教育事業に携わった後、Lauqhterを設立。独自に落語教材を開発し、出前授業や研修の講師などとして、3年間で4500人に落語教育を実施してきた。第14回全日本学生落語選手権策伝大賞優勝、「TOKYO STARTUP GATEWAY 2021」セミファイナリスト。